

白い象はみつからなかったけど

ハシモト ケンジ

: 見つかったの？

: ダメだった。

: そんな簡単に見つかるわけないものね、白い象なんて。ほんとにいるのかしら。無茶言うわよね。

: でもホントががんばったんだよ。もう一歩って感じだったんだけど。悔しいなあ。

: まあいいじゃない。探し物なんてそんなものよ、いつだって。自分が失くした物でさえすぐに出てこないんだから。

: 落とした場所にさえ戻れないもんな。キツイよ。

: そうよ、自分で探してみよってカンジ。あまり気にしないほうがいいわよ。

: フー、疲れた。もうこんな時間か。時間切れだ。

: もう終わりにしましょう。結果じゃなくて、捜した努力が大事なのよ、きっと。

: あんなにがんばったのになあ。結局どうして見つからなかったんだろう。

: 白い象ではなくても、きっと何か別のものを見つけたはずよ。きっと。自分には見えない何かを。

: そんな慰めは聞きたくないよ。マジへこむよ。

: 寒くなってきたわね。もう帰りましょう。

: ああ、そうしようか。

公園のベンチから立ち上がった男の背中汗でびっしょり濡れていた。

背中に張り付いた白いシャツが水銀灯に照らされたとき、女ははっとした。

男が散々探し回っても見つけることができなかった象の姿が、そこにくっきりと浮かび上がっていたのだ。

女は声をかけようと思ったが、とっさに口を押さえた。

男が離れたとき女は独り言をつぶやいた。

: きっと何か見つけたはずよ、きっと。

: えっ？なに？何か言った？

: ううん、何も。(あんなに苦労したんだもの、必ず何かを見つけたはずよ、あなたは。私には分かる。)